

## 旗振支部 ◆夏山登山◆

令和元年7月11日～12日

### 「霧ヶ峰・北八ヶ岳」

北野 利男

旗振支部は旗振茶屋・妙見堂・高倉山の三署名所より成る。ヒヨコ登山会の会員数では最大の支部であるが、日ごろ一緒に登山することは難しく、せめて年に一度は懇親と鍛錬のため、支部として一泊二日程度の「夏山登山」を行ってきた。制度化してから今回で13回目となる。

「霧ヶ峰・北八ヶ岳」行きは、昨年も計画したものの運悪く西日本豪雨のため中止、今年はリベンジの形となり、好天を祈っていたが・・・。



出発当日は偶々、須磨と舞子の海水浴場海開きの日、それを横目に山へ。18名の精鋭参加者は、チャーターしたバスに垂水漁港と須磨千森で乗り合せて7時に出発。名神・中央道を渋滞もなく走り、駒ヶ岳 SA で昼食休憩を摂った。



この辺りの中央道では、中央アルプスと南アルプスを左右に展望しながらの旅を期待したが、残念にも霧雨で視界なし。諏訪湖を遠望しつつ諏訪 IC で中央道と別れ、茅野市から大門街道～ビーナスラインを上り霧ヶ峰高原へ。



霧ヶ峰の最高峰は車山 1925m。霧深く歩いて登ることを断念し、安全のためスキーリフトを利用することにした。最も楽な百名山登山となった。リフトの上から足下に点在するニッコウキスゲやハクサンフウロなどを見つけては、心を和ませた。山頂では集合写真に収まり、天気の良い時の北・中・南アルプスや八ヶ岳の眺望を想像しただけで、早々に下山した。



(ニッコウキスゲ)



(ハクサンフウロ)

霧に霞んではいたが車山山頂には、かつて富士山頂にあったレーダー・ドームがある。「孤高の人」など山岳小説の作者である新田次郎が気象庁の幹部だった時代に、富士山頂に設置したものが、その後気象衛星に取って代わられたため、氏の故郷である茅野市に移され、今も気象庁所管の気象観測施設となっている。



時間が許せば行く予定だった八島湿原の花観察には、途中までバスで向かったが、霧が治まらないため諦めてホテルへ直行する事にした。洒落にはならないが、さすがに霧ヶ峰である。



白樺湖畔の「ホテルばいふのけむり」へ早めに着き、ゆったり温泉に浸かって7時から夕食会となった。食事はバイキング形式、飲み物もフリーだったのでゆっくり過ごせた。この辺りの霧ヶ峰や蓼科高原は冬もスキー場として、主に関東からの若者達が押し寄せるためか、素朴ながら安価で良心的なホテルだった。



好天を、祈る気持ちで迎えた翌朝、雨は無いが残念にも、秀麗な百名山の蓼科山や白樺湖の対岸の山々は霧に霞んでいた。6時半朝食。バスは8時に出発して北八ヶ岳に向かう、9時頃ピラタス・ロープウェイに乗り標高1771mの山麓から10分で2237mの坪庭へ運ばれた。このゴンドラは巨大で101人乗りらしい。

ここから北横岳へ向けて本格登山に取り掛かる。装備と気持ちを整えて、坪庭の看板を背に出発前の雄姿をパチリ。



「坪庭」は雄大な枯山水の庭園のごとく、岩山や植木が自然に造形された高原で、向いの山は霧が隠していたが縞枯山(下図)と言って、シラビソなどの生木の緑の帯と、枯れ木の帯とが交互に縞状になっていて、この縞模様が年々移動して行くという天然現象があり、大変珍しい。



坪庭を登り詰めると、やがて急傾斜の一本道となる。階段あり岩場の崖あり、次第に息が荒くなってしまふ。時どき水飲み休憩を取りながら行く。この山は高山植物の種類が多い山で、この時期ならではの珍しい花も見られた。



(オトギリソウ)



(オサバグサ)



途中横岳ヒュッテで一服し、最後の急登を克服。遂に北横岳山頂 2480mに立つ、ともあれ、「やった〜」みんな笑顔の万歳でパチリ。

日本アルプスの展望をかみ締めることが出来なかった残念さは残るが、みんな、自らの健康と頑張りで達成感を味わえたことと思う。

帰り道でも、小さくて地味ながら、可憐な花を見つけ乍ら、ガヤガヤと無事下山した。



(マイツルソウ)



(コイワカガミ)



(ゴゼンタチバナ)



(ミツバオウレン)



ロープウェイ麓の駅のレストランで昼食を摂り、バスに乗り込む。途中、蓼科温泉「小斎の湯」へ寄った。当初、趣ある温泉でゆっくり打ち上げでもと考えたが、今年からここでの食事が出来なくなり昼食を上で先に摂ったため、入浴のみにして、いそいそと帰神を急いだ。



帰途も順調で8時過ぎに神戸に帰還出来た。バスは今回も、長年お世話になっている松永運転手の采配で、杉浦運転手を補強して下さり、二人体制ながら費用も良心的で、かつ安全安心のスムーズなバス旅となった。

末筆ながら、松田支部長、乾さんをはじめ、全員の協力によりけがもなく無事に、笑顔で帰神できたことに深く感謝します。